

Title	バークリーのデザイン論 : 『アルシフロン』を中心に
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	日本建築学会近畿支部計画系研究報告集. 1989, 29, p. 953-956
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/26611">https://hdl.handle.net/11094/26611</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

バークリーのデザイン論  
— 『アルシフロン』を中心に —

正会員 藤田 治彦

『アルシフロン』の構成

1732年のバークリー(George Berkeley, 1685-1753)の著作『アルシフロン』は、キリスト教護教の立場をとるユーフラノルとクリートが、自由思想家アルシフロンおよびライシクルーズと、クリートの家で7日間をかけて行った会話を、ユーフラノルの客人ダイオンが報告するという形式を取った対話篇である。以下のような概要の1日ごとの7つの対話からなる。

第1対話では、自由思想について尋ねるユーフラノルに対して、おもにアルシフロンが答える。ユーフラノルにとって、アルシフロンとライシクルーズの自由思想は無神論である。人類全体の公共の福祉が人間本来の目的であることについては、立場の違いを越えて意見の一致を見た。<sup>1</sup> しかし、その目的の実現のために宗教的な、あるいは道徳的な信念または信仰が必要か否か、そして、それらの信念は正しいものなのか否かについては、これ以後の対話に持ち越される。

第2対話では、イギリスに帰化したオランダの医師で思想家でもあるマンデヴィル(Bernard Mandeville, 1670-1733)が著書『蜂の寓話』に示す、<sup>2</sup> 「個人の悪徳は社会の利益」として自由な人間の利己的な活動を公共の福祉を増進するものとして正当化する、自由思想の有用性が論議される。<sup>3</sup> ここでのみユーフラノルの主要な対話者は、アルシフロンに代わって、ライシクルーズである。

第3対話では、(18世紀初頭のイギリス社会の倫理を暴き出すようなマンデヴィルの、下からの自由思想に対して) 高踏的なシャフツベリ(The Third Earl of Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper, 1671-1713)の自由思想が論議される。<sup>4</sup> バークリーは、第2、第3の両対話を通じて自由思想の両極を俎上に載せ、自由思想家たちの教義の異種混交性を露呈させようと試みる。

以上のような過程を通じて マンデヴィルとシャフツベリに代表される自由思想のそれぞれの欠点を示したバークリーは、更に、両者ともに道徳生活における理性の位置を実際よりも低く見ており、そのために公共の福祉の実現のための有効な力とは成り得ないであろうという見解を述べ、<sup>5</sup> キリスト教信仰の弁護に移る。

バークリーは、ユーフラノルを自己の思想のおもな代弁者、クリートをその補足説明者として、第4章では有神論の真実性を、<sup>6</sup> 第5章ではキリスト教信仰の有用性を、<sup>7</sup> 第6章と第7章ではキリスト教信仰の真理を説くことになる。<sup>8</sup>

美学的論議 『アルシフロン』 第3対話

美の問題に関わるバークリーの論議は、『アルシフロン』の第3対話、就中、その第8、第9、そして第10節に展開されている。

第1節から第7節にかけては、シャフツベリの道徳哲学を代弁する役を担うアルシフロンがユーフラノルと「名誉」や「道徳美」について意見を交わし、ホスト役のクリートが類似の論争を紹介するなどして議論の促進を計る。物質界の美を知覚する身体的な感覚に対して「道徳美」を知覚する「道徳感覚」<sup>9</sup> と呼ばれるべき感覚があるとするアルシフロンの見解を理解しないユーフラノルが、物質に関わる美のみを論議の対象とすることを提案するという文脈で、バークリーは倫理学的問題から美学的問題へと移行する。

美を基本的に、理解されるものではなく、感知される"je ne sais quoi"(説明できぬもの)と主張してきたアルシフロンではあるが、<sup>10</sup> 巧みな誘導尋問により以下のようなユーフラノルの美に関する見解に同意することになる。

美は眼を喜ばしめるシンメトリーまたはプロポーションにある。<sup>11</sup> そのプロポーションとは、何らかの普

遍的なものではなく、あるものの他のものへの関係のことである。<sup>12</sup> 正しいプロポーションとは、諸部分の寸法と形態とが完全なひとつの全体を成すような状態にあることを意味する。<sup>13</sup> そのものが完全であるということは、それがその作られた目的に適っているということである。<sup>14</sup> このユーフラノルの見解はバークリーの美についての考え方に他ならない。

ユーフラノルは続けてアルシフロンの美に関する見解を根底から覆そうとする。ある部分を他の部分と比較したり、諸部分がひとつの全体に属することを確認したり、その全体の用途や目的を考えたりすることは理性の働きに相違ない。従って、プロポーションは、視覚によって知覚されるのではなく、視覚という手段を通じて理性によってはじめて認められる、<sup>15</sup> と言うのである。美は（アルシフロンという美でさえも）、眼の対象ではなく、精神の対象なのである。<sup>16</sup> 以上が第8節の主要な内容である。

第9節では、絵画に描かれた人物の衣裳と建築物とを具体的に考察の対象として取り上げている。バークリー自身による詳細な目次では、この節は「絵画と建築によって説明される美の観念」と題されているが<sup>17</sup> 建築の美に関してはともかくとして、近代的な意味での絵画作品の美を論じていることにはならない。バークリーは絵画芸術の愛好家でもあったようだが、ここで論じられているのは、絵画の美ではなく、あくまでも絵に描かれたものの美である。建築に関しては、ユーフラノルの口を借りて、次のように述べる。

エンタブレチュアとすべてのその各部分および諸装飾、すなわち、アーキトレヴ、フリーズ、コーニス、トライグリフ、メトープ、モウディリオン（軒持送り）、その他は、その建物に堅固さと一体感を与えることにおいて、それを風雨その他の荒天から守ることにおいて、それらの間隔によって梁の端を表現することなどにおいて、それぞれがひとつの用途、または、用途の現れ（the appearance of use）を有している。そして、もしわれわれがペディメントの優美な角度、円柱間の空間、あるいはそれらの柱頭の装飾を考究するならば、それらの美は、用途の現れ、または、その美が元来同じ原理に基づいているところの、自然界にあるものの模倣（the imitation of natural things）

から生じていることに気付かないことがあるだろうか？・・・

ここには、古典的な建築観だけではなく、古典的建築に対する好みも示されている。ユーフラノルは続ける。

・・・それは、実際のところ、古代ギリシア建築とゴシック建築との大きな相違であり、後者は異様で、そのほとんどの部分は自然にも、理性にも必要性にも、あるいは用途にも基づいておらず、その見るに堪える部分は古代ギリシア建築の美と優美さ、そして装飾によるものなのである。<sup>18</sup>

1世紀の後に、ほぼ同一の宗教的基盤、思想的基盤の上で、ピュージンは、古典主義建築とゴシック建築に関して、まったく正反対の判断を下すことになる。<sup>19</sup> 何れにしても、建築はバークリーの美学的考察にとって、もっとも理想的な基盤を提供するものであった。

（建築は）諸芸術の中でも殊更に、オーダー、プロポーション、そしてシンメトリーと格別な親しさにあると思われる。従って、それはわれわれが美における“je ne sais quoi”の、何らかの合理的な概念に近付くことを助ける可能性の一番高いものだと考えられはしないであろうか？ そして、実のところ、われわれはこの余談から次のことを学んだのではなからうか？ プロポーション無しに美が存在しないように、（さまざまな）プロポーションは、それらが何らかの一定の用途または目的に適切に関連している場合にのみ正しく、真であると考えられることになるのであり、それらのそのような目的への適切さと従属性とが、実際それらを満足で魅力的なものにしているであろう。<sup>20</sup>

#### デザイン論

この建築物についての論及に代表されるように、バークリーの美に関する考察の対象は基本的に現実空間に存在する実用機能を担ったものである。この事実はデザイン論の観点から注目し値する一方、草創期の18世紀イギリス美学にとっては、それは必ずしも例外的な特色ではなかったことも再確認しておく必要があるだろう。19世紀以降の美学的研究が芸術空間に置かれる芸術作品に過度に集中しているのである。他方、後者の視点からは、美を用途に依存させるバークリーの

近代美学への貢献は、さほど大きなものではなかったことも事実である。<sup>21</sup>

以上のように、一見、極度に合理主義的な美学を提出するパークリーではあるが、その『アルシフロン』執筆の動機は（アルシフロンのように）神に依拠することなく道徳を説こうとする自由思想家に対して、超越者と神意の存在を示すことであった。従って、ユーフラノル（パークリー）は、是認しないアルシフロンの「道徳美—道徳感覚」の概念を一旦通用させ、社会的関係における秩序とシンメトリーに基づいた「道徳美—道徳感覚」の概念は、結果と目的の概念を必要とするがゆえに、「道徳美」を語るならば、世界を偶然によって説明することはできず、目的と結果を有する神意の存在を認めねばならない、という方向へ議論を導いて行く。このようにして、「道徳美」の問題から「美」の問題へとひとたび話題を移した第3対話も、再び「道徳」の問題へと回帰して行くのである。<sup>22</sup> 第10節の冒頭でユーフラノルは次のように述べる。

この原則に従う私は、偶然や、運や、その他の盲目的な無思慮な原理によって形成され、結合され、支配されたひとつの道徳体系の中に、いかなる美が見いだされ得るのか、喜んで知りたいと思う。思考が無ければ目的あるいは構想は有り得ず、目的が無ければ用途は有り得ず、用途がなければ、そこから美が生まれるところのプロポーシヨンの適切さや適合性はないのである。<sup>23</sup>

#### 『アルシフロン』の反響

『アルシフロン』は出版されるや否や各方面からの反論を被った。1730年まで（パークリーの母校であり本拠地であったトリニティー・カレッジのある）ダブリンで教育に携わり、パークリーよりも早くマンデヴィル批判の論陣を張ったハチスンでさえも、1738年にはその主著『美と徳の觀念の根源の探求』第4版の、美の問題を扱う第1論文に、美を用途への適合性に還元するパークリー理論の限界を指摘し、その反「道徳感覚」論に反論する脚注を新たに挿入したほどである。<sup>24</sup>

パークリーの論理の力の多くは、その他の著述の幾つかにもみられるように、その論旨の明快さにある。適合性(fitness)の美の理論は、パークリーが没する1753年に、画家ホガスといういささか意外な後継者

を見いだした。思想的にも、造形美の領域においても、ギリシア古典を重んじるパークリーではあるが、『アルシフロン』には、古典的で固定的な美の觀念を覆す思考が織り込まれており、ホガスはそこに注目したようである。<sup>25</sup> 『アルシフロン』は、18世紀末のアリスンの『趣味論』を経て、<sup>26</sup> 19世紀の初頭に最終的な段階を迎えようとする、造形芸術における絶対的な美の規範の崩壊の始まりにも位置している。<sup>27</sup>

## ALCIPHRON: OR, THE MINUTE PHILOSOPHER. IN SEVEN DIALOGUES.

CONTAINING

*An APOLOGY for the CHRISTIAN RELIGION,  
against those who are called FREE-THINKERS.*

*They have forsaken me the Fountains of living waters, and hewed  
them out cisterns, broken cisterns that can hold no water.*  
Jerem. ii. 13.

*Sin mortuus, ut quidam minuti Philofophi censent, nihil sentiam,  
non veretur ne hunc errorem meum mortui Philofophi irrideant.*  
Cicero.

The THIRD EDITION.

L O N D O N :

Printed for J. and R. TONSON and S. DRAPER,  
in the Strand.

M DCC LII.

## 註

1. George Berkeley, Alciphron: or, the Minute Philosopher, London, 1752 (初版は1732年で、本論では A. A. Luce and T. E. Jessop(ed.), The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne, Nendeln, 1979, Vol. I を参照), 60-62.
2. Bernard de Mandeville, The Fable of the Bees: or, Private Vices, Publick Benefits, London, 1714 (上田辰之介訳『蜂の寓話』新紀元社 1950年)。1723年版で初めてマンデヴィルがその著者であることが明記された。『アルシフロン』が出版される1732年まで多くの版を重ねている。『アルシフロン』の原題は『蜂の寓話』を大いに意識したものになっている。
3. Berkeley, Alciphron, 65-111.
4. Ibid., 112-140.
5. Ibid., 136-140.
6. Ibid., 141-173.
7. Ibid., 174-218.
8. Ibid., 219-327.
9. Ibid., 120. シャフツベリの用語("moral sense")だが、その概念を大いに用いたのはハチスンである。Francis Hutcheson, An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, London, 1725. 本書は「シャフツベリの諸原理を説明、擁護する」と共に、やはり「『蜂の寓話』の著者に対抗する」内容を有すると、ハチスンは表題紙に明記している。拙論「ハチスンのデザイン論」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第27号、1987、921-924.
10. Berkeley, Alciphron, 119-120.
11. Ibid., 123.
12. Ibid., 123-124.
13. Ibid., 124.
14. Ibid., 124.
15. Ibid., 124.
16. Ibid., 124.
17. Ibid., 26.
18. Ibid., 127.
19. A. W. N. Pugin, The True Principles of Pointed or Christian Architecture, London, 1841.
20. Berkeley, Alciphron, 128. ( ) 内筆者補足。
21. J. O. Urmsom, "Berkeley on Beauty"(John Foster and Howard Robinson ed., Essays on Berkeley, A Trecentennial Celebration, Oxford, 1985, 227-232)などがバークリー-美学の限界を指摘している。但し、"The Appearance of Use" と "The Imitation of Natural Things" との関係構造の再解釈などにより、バークリー-美学の芸術作品への適用も無意味ではないと思われる。
22. Berkeley, Alciphron, 128-129.
23. Ibid., 128.
24. Hutcheson, An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, London, 1738 (4th Edition).
25. William Hogarth, The Analysis of Beauty, London, 1753. 拙論「ホガースのデザイン論」、日本建築学会近畿支部研究報告集、第28号、1988、817-820.
26. Archibald Alison, Essays on the Nature and Principles of Taste, Edinburgh, 1790. 拙論「アリスンの『趣味論』-デザインの位置をめぐって」、美学、第148号、1987、13-24.
27. 拙論「デザインの意味」、神林恒道他編『芸術学ハンドブック』、勁草書房、1989.

(京都工芸繊維大学助手・学博)